

小学校の英語活動にかかわる幻想と、先行実践について

内 野 信 幸

小学校英語活動に関する背景

来年、2011 年からいよいよ小学校での教科としての英語活動が始まる。この科目が提示された指導要領の内容について、その背景をまず知っておくことが大切だろう。小学校からの英語活動について、早い段階から警鐘を発している大津由雄は、昨年刊行した『危機に立つ日本の英語教育』（慶應大学出版会、2009 年）のなかで詳しくその背景を論じている。氏は、2002 年に策定された『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』とそれに基づいて翌年策定された『『英語が使える日本人』育成のための行動計画』に小学校英語の構想はあるとしている。さらに、同書の執筆者の一人江利川春雄は同書の「主権『財界』から主権『在民』の外国語教育政策へ」の中で、文部科学省からだされた上述の政策が、経済団体連合会の構想とほとんど一致していることを東京大学大学院生水野雅が指摘していると、以下のような表で示してくれている。

経団連の提言（2000 年）	文科省の「戦略構想」（2002 年）
英会話を重視した英語教育	実践的コミュニケーション能力の育成
小学校段階から英語教育を実施	小学校の英会話活動を支援
少人数指導、習熟度別学級、情報機器の利用等	少人数指導や習熟度別指導などの導入
英語教員採用試験への TOEIC・TOEFL 等の活用	英検、TOEFL、TOEIC 等のスコアの考慮により、英語力の所持を確認
英語教員への研修機会の拡大	英語教員の集中的研修の推進
英語能力に熟達した民間人の採用	英語に堪能な地域社会の人材の活用
外国人教員の積極的な採用	外国人の正規教員への採用の促進
センター試験でリスニングテスト実施	センター試験でリスニングテスト導入
企業の採用・昇進で英語力を重視	採用試験で英語力重視を求める

水野（2008）を改変

小学校の英語活動が導入された背後には、こうした経済と政治の背景とともに、学生が小学校教員になった時に会うであろう、親・保護者たちの英語教育幻想にも対処しておかなくてはならない。その幻想は親たちだけではなく、学生たちのものでもあるかもしれない。その幻想を次に取り上げていく。

英語を十年近く勉強したのに英語で会話ができない幻想

この幻想は、実は、学生と親御さんたちだけのものではない。筆者（内野）も身近なところで体験したことがある。ある日の教授会で、専門教育を担当されている教員から「私の講義中にぶつぶつ何か言っている学生がいたので、注意をしたところ、その学生から すいません、今日英語の試験があるので、訳を暗記していました」という言葉を聞きました。まだ、本学の英語の教育は 読んで、訳す という古い授業のやり方でやっているんですか。そういう古臭い指導だから、十年近く英語を教えられてもちっとも話せるようにならないのですね」と、英語教育批判をもろに聞かされた。大学教員でもこう思っている人がいるのだから、保護者の方々については推して知るべしだろう。確かに、「十年近く」と年数で言われると、確かに長いと思われるから、その批判は妥当のように思われる。

だが、その批判を吟味しながら、英語の授業時間数で考えてみればその十年間の中身がどうなるか、とらえてみた。中学校週 3 時間、高校で週 5 時間、授業数を 42 週として単純計算すると、中学 3 年間で 378 時間、同様に高校では 630 時間、日数で換算すると、16 日と 42 日にしかすぎない。このことを上述の批判を受けた当時、筆者はこの時間数で勉強しても、英語を話せるようにならないのはむしろ当然ではないか、と二十年以上の前の『研究紀要』（1990 年 4 月）で論じた。勢古浩爾『目にあまる英語バカ』（三五館、2007 年）にも「『十年間勉強したのに』の大ウソ」という項目（150～154 ページ）で同様のことを述べている。

長い間繰り返し行われてきた英語教育「批判」だが、もしこのような批判があっても、先生たちはたじろぐ必要はない。ちなみに、『第二言語の習得』（Wolfgang Klen, *Second Language Acquisition* (Cambridge Univ. Press, 1986, p. 9) でも仮に日に 5 時間 5 才になるまで 9100 時間をかけて第一言語を身につけていくが、第二言語習得のための英語学校で、6 週間のコースで毎日 12 時間英語の教育を受けることにするとほぼ 500 時間で何とか英語が使えるようになるという数字を示している。こうしたことからわかるとおり、外国語教育には十二分な時間が必要であることが理解できるだろう。

早期教育……英語教育にかかわる臨界期

小学校の英語活動に関して、もうひとつ出てくるのが、「言葉の教育は早ければ早いほどよい」という早期英語教育という考え方だ。筆者が参加してきた神奈川県や横浜、兵庫県での研究集

会でも英語での生活体験がある地域住民の方、親たちが協力者として小学校の英語活動に加わって指導協力していると小学校の教師から複数報告された。通勤電車の中でも、市井の英語学校が「英語指導講師の資格をとろう」という宣伝を行っている。テレビのコマーシャルでも有名なグループのメンバーが、英語を上手に使える少女を相手にするシーンが流されている。こうした視覚からなんとなく英語は早くからやれば、テレビの子どものようにうまく英語が「喋れるのだ」と思いこまれる。

しかし、脳科学者の中には早期教育には警鐘を鳴らす研究者もいる。小西行朗は自著、『早期教育と脳』（光文社新書、2004年）の中で、文科省による「脳科学と教育」プロジェクトに参加する学者のなかでも、臨界期という「人の高次機能の感受性期（臨界期）が明らかになるかどうかについてわかっていない（略）。人の感受性期は慎重に考える必要がある」（小西、31ページ）という意見を紹介して、「このように専門家の間では、人間の多様性と今日の育児環境、脳科学研究の現状をふまえ、『臨界期』など脳科学と教育の問題には、慎重に取り組むべきという意見が多く聞かれます。その理由は、先述した『臨界期』が教育的効果においてのみ捉えられる風潮への懸念と併せ、研究の方向性や手法に課題が残っているためです。」（小西、31～32ページ）と、慎重な意見を開示している。「第二章 乳幼児と英語教育」で、5つの提言を行っているが、「早期教育を低年齢から始める必要はない」としたうえで、本人のやる気、意欲がなにより大切で、早期教育を始めるには親にも覚悟がいること、「英語もしゃべることよりしゃべる内容」が大切で、日本語が第一言語で、英語は「第二言語であるから」、「あまり効果を求めず英語を通して親子関係を深めることが大切」だ、と主張する。（小西、81ページ）傾聴に値する意見だ。

また、兵庫県で現役の中学英語教師をしている研究仲間が、小学校で英語を指導した機会を利用して、その小学生が中学で英語の力がどのようになっていくか、アンケート調査をもとに、その結果を分析して2007年8月に行われた小学校英語教育学会で報告した資料をもらった。その資料によれば、小学校で英語に触れた子どもも、最初の一年ぐらいは学習に積極性を示すが、その後は、中学で初めて英語に触れた子どもと学力的にもほぼ同じようになっていくし、興味も薄れていくという。過度な早期英語教育については、大人の側も冷静に対処する必要がある。

バイリンガルはカッコいい（か）？

上述した事項と結びついてしばしば取りざたされるのがバイリンガルにかかわる幻想だ。私事になって恐縮だが、筆者の友人の甥が小学校入学前に父親の仕事の関係で二年ほどオーストラリアで生活することになった。現地の学校に通ったと聞いていた。その家族が帰国する事になり、空港に友人と迎えに行った。しばらくだったな！と筆者が声をかけて、頭をポンと叩いたら、その子から“Ouch！”の声が上がった。その後、日本での生活になったのだが、高校受験を前に、彼の祖母さんから筆者に英語を教えて欲しいと頼まれた。少々驚いたが、その子に尋ねると、新出の英語の発音ができないのと、英文法がまったくわからないとのことだった。音読

をさせてみると確かにきれいな発音でそれなりに音読はできていた。だが、和文英訳になるとまったく英文の語順がめちゃくちゃになっていたのを今でも思い出す。結局、現地の子どもたちと英語を使って遊ぶこともできたし、学校にも通ったのだが、帰国後は彼の体験と英語にかかわる文法や作文といった力をうまく維持していけなかった。茂木弘道『文科省が英語を壊す』（中公新書ラクレ、2004年）の中で、小野博『バイリンガルの科学 どうすればなれるのか？』（講談社ブルーバック、1994年）で取り上げられている、ネイティブ並みに英語を話せる帰国子女が、日本の言語環境の中に置かれると、週1回2時間、英会話スクールならぬ英語保持教室に通っても、ネイティブ並みの英語力がどんどん失われていってしまうという事例を取り上げて、バイリンガルの困難性を茂木は指摘している。この指摘を考えると、「英語ゼロ状態の小学生に週二時間くらい英会話を教えても、記憶に残るものはほとんどない、ということにならざるをえないのではないか。事実そうなのである」（茂木、51ページ）。友人の甥の場合もまさにこのことを実証している。また、『バイリンガルの科学』では、バイリンガルにかかわる「神話」や「幻想」について「バイリンガルへの道はきちんとした母語の習得から」と柱を立ててからでない、外国語の学習成果も中途半端なものになってしまう、と警鐘を鳴らしている。「海外で日本人の言語力に関する追跡調査」（小野、40ページ）などをもとに、バイリンガル 神話、幻想 を砕いてくれる。

したがって、少しでも早く英語を学ばせても臨界期についての項でも述べたように、中学校で英語を学び出した段階では多少の効果も表われるが、その後は小学校の段階で学ぼうとそうでない場合でも大きな差はうまれない。さらに、バイリンガルにしても2言語をしっかりと身につけていくためには、その環境づくりには大変な努力が子どもにも親にも必要なことは明らかだ。さらに、子どもが当該の外国語を使ってどう生きるか、明確な目標を持っていかなければならないだろう。今一度、小学校からの英語活動について、冷静に見直しておく必要がある。古くから子どもへの早期英語教育に対しては、疑問や批判が示されてきた。中津稜子・鳥飼玖美子著『子どもに外国語はいらない 地球時代の井戸端会議』（文藝春秋、1981年）をかわきりに、市川力著『英語を子どもに教えるな』（中公新書ラクレ、2004年）、山田雄一郎著『日本の英語教育』（岩波新書、2005年）、鳥飼玖美子著『危うし！小学校英語』（文藝春秋新書）などがすでに出版されている。どれも新書版だから簡単に入手できるし、どの本も難しいものではない。さらに簡単に読めるものはブックレットで山田雄一郎・大津由紀雄・斎藤兆史著『「英語が使える日本人」は育つのか？小学校英語から大学英語までを検証する』（岩波ブックレット、2009年）が出版されている。これらの著作は小学校での英語指導については、慎重論を唱えている。

小学校の教師たちは確かに一生懸命に小学生たちに英語を教える努力をしている。筆者も参加してきた教育フォーラムや教育研究集会でも、小学校での英語活動に関する多くの実践を耳にする。昼休みを使って、ALTとディスクジョッキーをしたり、英語漫才をしたり、と「楽しい英語」の雰囲気づくりをしようとしている。こうした努力と実践に水を指すつもりはない、と断ったうえで、少し時間をとって、小学生への英語指導について警鐘を鳴らす意見にも耳を傾けて、

自己の考えを深めてほしい、と筆者は意見を述べるようにしている。同席した中学を退職した元英語教員も、小学校の先生方も無理しないで、できる範囲で英語指導をして下されば良いのですと意見を述べていた。小学校の教員が英語活動でうまくいかなくとも、中学校の英語教員は専門的知識と実践の中で小学校での不十分さを補っていけば良い。

小学校の教師という特性を活かして

小学校の英語活動についての批判的見解はどれも傾聴に値する。しかしながら、来年から始まるこの授業にどう取り組んだらよいのか。また、文科省の『英語ノート』も2010年度については国の予算は復活したが、それ以降はどうかは不明だ。だが、『英語ノート』に頼らずに授業を行うことを目指さなければならないだろう。神奈川県の実験小学校では、語順の問題に考慮したかどうか不明だが、5年6年生用のプリント教材で There's ~ 構文を指導していたりしていた。この構文の難しさは主語の位置がbe動詞の後ろにくるという点で、中学生でも混乱する構文だ。研究会の席上、この構文の難しさについて筆者は指摘しておいたが、報告の小学校教師には納得してもらえたようだった。しかも、isの省略形を使っただけの教材プリントが目立っていたが、複数のsやTom'sなど所有を示す、アポストロフィのsとも混乱が起きる。会話では短縮形が用いられるからと言って、外国語の基本的決まりを身につけさせていくときには混乱を避けて、丁寧な指導を目指したい。

大きな声で歌とゲーム、これにも飽きが来る

小学校での英語活動では、英語の歌やゲームには確かに取り組みやすいだろう。だが、いわゆる「キラキラ星」の替え歌、「アルファベットソング」でも注意が必要だ。この歌はこれまで使われていた中学英語教科書のほとんどに掲載されていた。その時の英語教科書では、子どもたちの唄いやすさを「重視(?)」して、.....j・k・l・m・nとnの部分で切り、o・p・q.....と続けて歌っていた。しかし、英語教育研究者からの指摘もあり、l・m・n・o・pまで唄うようになってきている。そのように唄うほうが、2つの点で意義がある。ひとつは、「エル」の「ル」と次の「エム」のとの結合が起こり、「ルエ」がレ、同様に「エム」と「エヌ」とが「ムエ」がメと変化していく。つまり、子音と母音の結合ということが理解できる。さらに、そう唄うことによって、末尾の発音がイーで韻を踏むという英詩の法則も成立する。ちなみに、筆者も授業導入期で使うビデオ教材「えいごのリズムあそび(『しまじろうのすきすきミュージックシリーズ』、ベネッセコーポレーション、1998年)のなかでも、「エレメノピー」と年長組だと思われる子どもたちは唄っている。学生たちも「しまじろうだ」などと喜ぶのだが、当該の部分をもどのように唄ってきたかと尋ねると、「エル・エム・エヌ・オウ・ピー」だと応える者が多い。唄いやすく伝統的に使われてきた歌だが、意外と内容も深い。

また、多くの大学生も誤解しているのだが、アルファベットの発音が「エイ・ビー・スイ〜」だと思いこんでいる。中学生の頃、筆者もそのように誤解していた者の一人だ。アルファベットには エイ・ビー・スイ〜 という呼び名と ア、ブ、ク (ス)、ドウ…… という 発音 とがあることを小学校高学年にはやはり、きちんと指導しておきたい。「英語は耳から」という、英語を母語とする人々の習得過程を無批判に受け入れたであろう指導要領では、小学校では文字は教えなくてよい、という。だが、りんごの絵とともに apple、蟻の絵と ant、腕の絵と arm が書いてあっても、問題になることはないだろう。中学校との連携においても、小学校側からの伝達事項として、発音とスペルの関係をどこまで指導したかを伝えることができると考えられる。

身近な外国語探索

また、身近なところにある外国語にも目を向けさせたい。お菓子や食料品の包装紙に子どもたちの目を向けさせてみるのも、外国語が日常生活に入り込んでいることを理解させる機会にもなる。筆者も身の周りを調べてると、「5つのおいしさ! Mini Bit Assort」というチョコレートの詰め合わせ、またカップ麺には「ヌードル Noodle」、朝市に出店している韓国人の元気の良い中年女性の出店で買うインスタントラーメンにはハングルの文字が見つかる。筆者の考えは、黒田龍之介著『にぎやかな外国語の世界』(白水社、2007年)という大変興味深い著作に依拠している。コンビニエンスストアで買った海老のスナック菓子は日本語の説明でタイからの輸入品であることがわかり、袋に印刷されている文字はタイ語、そして海老の隣には、包装紙には独、仏、伊という言語に加えて、チェコ語、スロヴァキア語、クロアチア語、ハンガリー語となどなどで、「高温多湿を避けて保存してください。ってなことが書いてあるのでしょうか」(同、18ページ)と数ヶ国語で書かれた包装紙に包まれたウエハース。同書には「オンドリはどこでも『コケッココ?』か」では雄鶏の鳴き声の多様性が紹介されたりしており、興味深い。

さらに、世界共通語を目指そうとするエスペラント語についても、「国際共通語という夢」(黒田、156~157ページ)というコラムで「みんなに平等という発想は立派です。でも国際共通語1つだけでみんながコミュニケーションできる世の中は、果たして幸せなんでしょうか。少なくとも、にぎやかな外国語の世界を目指すわたしにとっては、英語だろうとエスペラントだろうと、たった1つの言語の世界はやっぱりつまらないのです」(黒田、157ページ)と述べているし、さらにその次の「言語がどんどん消えてしまう」というコラム(黒田、158~159ページ)では、3000とも5000とも、さらに7000ともあると言われている言語のうち21世紀中にはその75~90%が消えてしまうという少数言語の消滅という問題も含めて大変重要な言語の存亡という問題を取り上げている。筆者も各地の研究集会も、この著作を紹介して英語だけではなく、それ以外の外国語の世界の面白さも子どもたちに伝える授業の豊かさが必要だと私見を述べている。

市川力著『「教えない」英語教育』(中公新書ラクレ、2005年)は、まさに小学校教師たちの特長を活かした授業を紹介してくれている。高学年になると、英語の歌やゲームにも飽きてしま

う、という意見を筆者も研究集会の場で耳にした。たとえば、アルファベットはどのようにして生まれてきたのかな？ とか、なんで英語がアメリカ合衆国で使われるようになったのかな？ など、いわゆる「調べ学習」をしていくのも良いのではないか？あるいは、日本語教育も担当されているのなら、その教材を使い、日本語と英語の違いなどに子どもの目を向けさせていくこともできるのではないだろうか。英語活動といっても、英語だけを教えていくと、固定的に考えないで、言語と思考の世界を広げていく機会を子どもに提供して、ことばの世界の面白さや不思議さなどを実感させていくことは大切なことではないか。それが、筆者の言葉では「思考の世界の国際化」につながっていくと言える。

引用、参考文献

- 小野博 『バイリンガルの科学』（講談社ブルーバック、1994年）.
小西行郎 『早期教育と脳』（光文社、2004年）.
茂木弘道 『文科省が英語を壊す』（中公新書クラレ、2004年）.
市川力 『英語子どもに教えるな』（中公クラレ、2004年）.
市川力 『「教えない」英語教育』（中公クラレ、2005年）.
鳥飼玖美子 『危うし！小学校英語』（文藝春秋、2006年）.
黒田龍之助 『にぎやかな外国語の世界』（白水社、2007年）。なお引用に際しては漢字のルビは省略させていただいた。
勢古浩爾 『目にあまる英語バカ』（三五館、2007年）.
金谷憲 『英語教育熱』（研究社、2008年）.
大津由紀雄 『危機に立つ日本の英語教育』（慶應大学出版会、2009年）.
山田雄一郎、大津由紀雄、斎藤兆史 『「英語が使える日本人」は育つのか』（岩波ブックレット、2009年）.
薬師院仁志 『英語を学べばバカになる グローバル思考という妄想』（光文社新書、2005年）.

付記：引用に際しては、敬称と漢字のルビを省かせていただいたことを付記してお詫びし、感謝を表したい。